9/4 9/10 9/11 9/18

ONO Kazushi

Music Director

音楽監督 大野和士

1987年トスカニーニ国際指揮者コンクール優勝。これまでに、ザグレブ・フィル音楽監督、都響指揮者、東京フィル常任指揮者、バーデン州立歌劇場音楽総監督、ベルギー王立歌劇場（モネ劇場）音楽監督、アルトゥーロ・トスカニーニ・フィル首席客演指揮者、フランス国立リヨン歌劇場首席指揮者を歴任。現在、都響およびバルセロナ響の音楽監督を務めている。2016年9月に新国立劇場オペラ部門芸術参与へ就任、2018年9月に同劇場芸術監督へ就任予定。フランス批評家大賞、朝日賞など受賞多数。文化功労者。2017年6月、フランス政府より芸術文化勲章「オフィシエ」を受章、またリヨン市からリヨン市特別メダルを授与された。

Kazushi Ono is currently Music Director of Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra and Barcelona Symphony Orchestra. He was formerly General Music Director of Badisches Staatstheater Karlsruhe, Music Director of La Monnaie in Brussels, Principal Guest Conductor of Filarmonica Arturo Toscanini, and Principal Conductor of Opéra National de Lyon. Ono was appointed Artistic Consultant of New National Theatre, Tokyo in September 2016, and will be inaugurated as Artistic Director of same Theatre in September 2018.

© 堀田力丸

A Series

第838回 定期演奏会Aシリーズ

Subscription Concert No.838 A Series

東京文化会館

2017年9月4日(月) 19:00開演

Mon. 4 September 2017, 19:00 at Tokyo Bunka Kaikan

指揮 ● 大野和士 ONO Kazushi, Conductor
ピアノ ● ハオチェン・チャン Haochen ZHANG, Piano
コンサートマスター ● 山本友重 YAMAMOTO Tomoshige, Concertmaster

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第3番 ニ短調 op.30 (43分)

Rachmaninov: Piano Concerto No. 3 in D Minor, op.30

Ⅰ Allegro ma non tanto
Ⅱ Intermezzo: Adagio
Ⅲ Finale: Alla breve

休憩 / Intermission (20 分)

ラフマニノフ：交響曲第3番 イ短調 op.44 (37分)

Rachmaninov: Symphony No. 3 in A Minor, op. 44

Ⅰ Lento - Allegro moderato
Ⅱ Adagio ma non troppo - Allegro vivace
Ⅲ Allegro

主催：公益財団法人東京都交響楽団
後援：東京都、東京都教育委員会
助成：文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)
文化庁

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

お願い 演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。
写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

Piano

Haochen ZHANG

ピアノ

ハオチェン・チャン

©Benjamin Ealovega

1990年上海生まれ。2009年、第13回ヴァン・クライバーン国際コンクールで史上最年少優勝。以来、その深く繊細な音楽性と大胆な想像力、そして目を見張るほどのテクニックで世界の聴衆を魅了している。これまでにマゼール、ティルソン・トーマス、ゲルギエフ、ヘンゲルブロックらの指揮のもと、ミュンヘン・フィル、フィラデルフィア管、ロサンゼルス・フィル、ロンドン響、マリインスキー劇場管、NDRエルプフィルなどと共演。2017年2月に、BISレーベルより新譜をリリース。

Haochen Zhang was born in Shanghai in 1990. He won the 1st prize at 2009 Van Cliburn International Piano Competition – the youngest artist ever to do so. Zhang has performed with orchestras including Münchner Philharmoniker, Philadelphia Orchestra, Los Angeles Philharmonic, London Symphony, Mariinsky Orchestra, and NDR Elbphilharmonie Orchester under baton of conductors such as Maazel, Tilson Thomas, Gergiev, and Hengelbrock.

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第3番 ニ短調 op.30

セルゲイ・ラフマニノフ（1873～1943）は1906年秋、ロシア国内の政情不安を避けて作曲に専念するために、ドレスデンに居を定めた。ドレスデンで彼の創作意欲は大きな高まりをみせ、交響曲第２番や交響詩《死の島》などの傑作がこの時期に生み出されることになる。

ピアノ協奏曲第３番もそのドレスデン時代に構想がなされ、1909年にモスクワに戻ってから本格的に作曲が進められる。この年の秋から翌1910年初めにかけてラフマニノフはピアニストとしてアメリカへの演奏旅行を計画しており、その際に披露する新作としてこの協奏曲を書いたのだった。作品は出立前の９月には大かた出来上がったが、細部の仕上げは旅行中になされ、1909年11月28日ニューヨークにて彼の独奏、ウォルター・ダムロッシュ（1862～1950）の指揮で初演されている。また翌年１月16日にラフマニノフはニューヨークでグスタフ・マーラー（1860～1911）の指揮によってこの曲を再演した。

この作品は伝統的な３楽章構成のうちに名技的な鮮やかさとロシア的な叙情とを結び付けている点で、前作のピアノ協奏曲第２番のスタイルを受け継いでいるが、技巧的な難しさという点では第２番をはるかに上回り、力強さと敏捷さの両方を要する指の動きと、時に跳躍的、時に連続的に現れる広い音域の和音をしっかり掴んで響かせる力量がピアニストに求められている。管弦楽パートもきわめてシンフォニックに書かれているが、第２番と違って（もちろんソリストに力量があることを前提としてのことだが）ピアノ独奏がオーケストラの響きに埋もれないように書かれている点に、ラフマニノフの書法の一層の熟達ぶりが示されているといえるだろう。

全体の綿密な造りにも注目すべきものがある。第１楽章の第１主題が全体の循環主題となり、またそれに由来する様々な楽想が全曲にわたって現れる一方、曲冒頭の付点リズムが全曲とおしての重要なリズム動機となっているし、さらに第１楽章第２主題も終楽章で回帰し、第２、第３楽章の主要主題も第１楽章の主題と関わりがあるなど、作品全体が第１楽章の主要な主題と動機から発展しているといって過言ではない。それによって全曲が有機的な統一体を形成しているわけだが、にもかかわらず、聴いた印象ではヴィルトゥオーゾがラプソディックな奔放さでもって気分赴くままに楽想を繰り出していくような感がある。超絶的な名技の鮮やかさと論理的構成とが表裏一体となっているところにこの作品の傑作たるゆえんがあるといえるだろう。

第1楽章　アレグロ・マ・ノン・タント　付点リズムを伴う２小節の導入の後、独奏ピアノが全曲の循環主題となる第１主題を提示する。両手ユニゾンでシンプルに示

されるこの主題は、作曲者自身は否定しているもののロシア（キエフ）の聖歌《ああ救世主よ、汝の棺を番兵が守る》に基づくといわれるもの。第２主題はまず弦、次いで管に軽快なスタッカートで現れ、続いてピアノがたっぷりしたレガートのカンタービレで発展させる。

展開部は第１主題冒頭の再帰（ここも独奏の両手ユニゾン）に始まり、起伏に満ちた展開が繰り広げられた後、カデンツァ（ラフマニノフ自身のものが２種類ある）へ至る。やがてピアノ独奏を背景に管楽器がソロで第１主題をリレーする部分となるが、その後カデンツァが再開されて第２主題が情感豊かに扱われる。

そして第１主題が曲頭と全く同じ形で再現されるが、この再現部はきわめて圧縮されており、第２主題の再現は（前のカデンツァで存分に扱ったこともあってか）省略されている。

第２楽章　インテルメッゾ／アダージョ　イ長調の幻想的な緩徐楽章。オーボエが暗い叙情を湛えたメランコリックな主題を示し、弦が受け継いだ後、ピアノが錯綜した響きで登場して主題を濃密に変奏していく。途中テンポが速まり、循環主題（第１楽章第１主題）の変形がクラリネットに現れて気分に変化をもたらすが、全体的には暗い情感が支配的だ。最後はピアノのカデンツァ風の華麗なパッセージを伴う経過句で休みなく次の楽章へ移る。

第３楽章　フィナーレ／アッラ・ブレーヴェ　ピアノの巨匠ラフマニノフのヴィルトゥオジティをフルに発揮したようなフィナーレ。独奏が力強く示す第１主題、行進曲調の楽想、シンコペーションの和音で突進するように上下行する楽想、そして広大な第２主題など、多くの楽想が現れ、さらに展開部に相当する部分では第１楽章の２つの主題が様々な形で用いられる。コーダで第２主題が壮大に浮かび上がる様は圧巻で、最後は圧倒的な興奮の渦のうちにニ長調で全曲を閉じる。

（寺西基之）

作曲年代：1909年

初　　演：1909年11月28日　ニューヨーク
作曲者独奏　ウォルター・ダムロッシュ指揮

楽器編成：フルート２、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、ホルン４、トランペット２、トロンボーン３、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、小太鼓、弦楽５部、独奏ピアノ

ラフマニノフ：
交響曲第3番 イ短調 op.44

1918年初頭、ロシア革命直後の不安定な情勢を避けてモスクワを離れたセルゲイ・ラフマニノフ（1873～1943）は、フィンランド国境を越え、ストックホルムなどで演奏会を行ったあと、オスロから蒸気船に乗り、アメリカへ渡った。当初、これは一時的な旅行のつもりだったようだが、よく知られている通り、彼は二度と故国の土を踏むことなく、25年後にカリフォルニア州ビヴァリーヒルズで世を去ることになる。もちろんこのとき、彼はそのような運命を予想していなかっただろう。

さて、ロシアを離れ、生活が激変してしまったラフマニノフは、なかなか本格的な作曲活動を再開することができなかった。彼がようやく次の作品を完成させたのは1926年、つまり、出国から実に８年後のことだった。ロシアで書き始め、中断していたピアノ協奏曲第４番だ。しかし、その後も以前のような作曲のペースは戻らなかった。

ロシアを出てから亡くなるまでの25年間にラフマニノフが書いた作品は、小さな編曲を除けば、ピアノ協奏曲第４番ト短調op.40（1926年）、合唱と管弦楽のための《3つのロシアの歌》op.41（1926年）、ピアノ独奏のための《コレッリの主題による変奏曲》op.42（1931年）、ピアノと管弦楽のための《パガニーニの主題による狂詩曲》op.43（1934年）、交響曲第３番イ短調op.44（1936年）、そして《交響的舞曲》op.45（1940年）のわずか６曲にとどまる。

彼がこれほど寡作になった理由は推測するしかないが、ピアニストとしての活動が多忙を極めたこと、彼の作曲スタイルが批評家らから時代遅れと決めつけられたこと、故国を離れたことによる創作意欲の減退などが指摘されている。

交響曲第３番は、ラフマニノフの最後の交響曲であり、全創作の中でも最後から２番目の作品だ。交響曲第２番が完成したのが1907年なので、およそ30年ぶりの交響曲ということになる。着手されたのは1935年春で、1936年６月６日には全曲が一応の完成を見たが、作曲者は６月末まで手を入れ続けた。同年秋、レオポルド・ストコフスキー（1882～1977）指揮フィラデルフィア管弦楽団によって行われた初演は、失敗というほどでもなかったが、大成功でもなかったようだ。ただ、ラフマニノフはこの曲に強い愛着を持っており、自分の最も優れた代表作のひとつだと考えていた。1939年、彼は自らフィラデルフィア管弦楽団を指揮してこの曲の録音を行っている。

交響曲第３番は、４つの楽章をもつ第１番や第２番と異なり、急－緩－急の３つの楽章から構成されている。一般的な４楽章の交響曲と比べると、スケルツォを欠く形となっているのだが、第２楽章の中間部には急速な部分があり、実質的にスケ

ルツォが融合されていると見ることができる。緩徐楽章の途中にスケルツォ風の部分を挿入するという手法を用いた交響曲としては、他にフランクの交響曲ニ短調があるが、むしろ、ロシアの作曲家たちのピアノ協奏曲（チャイコフスキーの第1番、ラフマニノフ自身の第2番や第3番、プロコフィエフの第3番など）との共通性を考えるべきかもしれない。

第1楽章　レント～アレグロ・モデラート　寒々とした短い序奏に始まる。聖歌の断片のようなこの序奏音型は、第2、3楽章にも現れて、全曲に統一感を与えている。序奏に続いてオーボエとファゴットが吹くイ短調の第1主題と、チェロの歌うホ長調の第2主題に基づくソナタ形式の楽章で、再現部では、両主題が提示部よりもずっとノスタルジックな表情とともに歌われるのが印象的だ。楽章の最後は、弦が静かに奏する序奏主題によって閉じられる。

第2楽章　アダージョ・マ・ノン・トロッポ～アレグロ・ヴィヴァーチェ　ハープのアルペッジョに伴われてホルンが歌う旋律で始まる。吟遊詩人の歌を思わせるこの旋律は、第1楽章序奏に基づいている。続いて独奏ヴァイオリンが、下降音型を特徴とする主要主題を歌い始める。途中、テンポがアレグロ・ヴィヴァーチェに変わり、スケルツォ風の激しい中間部となるが、最後に再び楽章前半のゆっくりとした部分が短く再現される。

第3楽章　アレグロ　自由な形式（単一主題によるソナタ形式と見ることも可能）のフィナーレ。華やかな開始に続き、いくつかの主題が次々に提示されたあと、フーガを核とする中間部に入る。その後、冒頭の主題が復帰し、高揚して全曲を締めくくる。楽章の後半には、ラフマニノフが強いこだわりを持っていた、グレゴリオ聖歌《怒りの日》の旋律も現れる。

（増田良介）

作曲年代：1935年6月～1936年6月　改訂／1938年
初　　演：1936年11月6日　フィラデルフィア
　　レオポルド・ストコフスキー指揮　フィラデルフィア管弦楽団
楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、シロフォン、トライアングル、小太鼓、大太鼓、シンバル、タンブリン、タムタム、ハープ、チェレスタ、弦楽5部

C Series

第839回 定期演奏会Cシリーズ
Subscription Concert No.839 C Series

東京芸術劇場コンサートホール

2017年9月10日(日) 14:00開演
Sun. 10 September 2017, 14:00 at Tokyo Metropolitan Theatre

B Series

第840回 定期演奏会Bシリーズ
Subscription Concert No.840 B Series

サントリーホール

2017年9月11日(月) 19:00開演
Mon. 11 September 2017, 19:00 at Suntory Hall

指揮 ● 大野和士 ONO Kazushi, Conductor
ソプラノ ● 林 正子 HAYASHI Masako, Soprano
テノール ● 吉田浩之 YOSHIDA Hiroyuki, Tenor
バリトン ● ディートリヒ・ヘンシェル Dietrich HENSCHEL, Baritone
合唱 ● スウェーデン放送合唱団 Swedish Radio Choir, Chorus
合唱指揮 ● ペーター・ダイクストラ Peter DIJKSTRA, Chorus Master
コンサートマスター ● 矢部達哉 YABE Tatsuya, Concertmaster

ハイドン：オラトリオ《天地創造》 Hob.XXI:2（110分）
Haydn: Die Schöpfung (The Creation), Hob.XXI:2

通奏低音／渡邊 孝（フォルテピアノ） 田中雅弘（チェロ）

第19〜20曲の間に休憩(20分) /Intermission (20 minutes) between No.19 and No.20

ドイツ語上演／日本語字幕付き
日本語字幕／三ヶ尻正
字幕操作：まくうち

別冊歌詞対訳もご参照ください。

主催：公益財団法人東京都交響楽団
後援：スウェーデン大使館、東京都、東京都教育委員会
シリーズ支援：明治安田生命 (9/11)
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業） 文化庁
公益財団法人三菱UFJ信託芸術文化財団
公益財団法人 ローム ミュージック ファンデーション

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

ヤングシート対象公演（9/10）（青少年を年間500名ご招待）協賛企業・団体はP.71、募集はP.74をご覧ください。YOUNG SEAT ヤングシート

お願い 演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

Soprano

HAYASHI Masako

ソプラノ

林 正子

©anju

東京藝術大学卒業。同大学院、二期会オペラスタジオ修了。ジュネーヴ音楽院ソリスト・ディプロマ取得。五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。スイス・ロマンド管との共演、オーストリアの音楽祭への参加などヨーロッパを拠点に活動。国内でも東京二期会『サロメ』『ダナエの愛』『ナクソス島のアリアドネ』『ばらの騎士』に主演。コンサートでも主要オーケストラと共演、ソリストとして活躍。ジュネーヴ在住。二期会会員。

Masako Hayashi graduated from Tokyo University of the Arts. She completed a master's degree at the same university and the course of Nikikai Opera Institute. She also obtained a soloist diploma at the Conservatoire de musique de Genève. Hayashi is based in Europe. In Japan, she has performed leading roles in operas including *Salome, Die Liebe der Danae*, *Ariadne auf Naxos,* and *Rosenkavalier.* Currently, she lives in Genève. She is a member of Nikikai.

Tenor

YOSHIDA Hiroyuki

テノール

吉田浩之

©Kyota Miyazono

敦賀市出身。幅広いレパートリーを持ち、瑞々しく伸びやかな美声と叙情性豊かな表現力で常に聴衆を魅了している。新国立劇場、日生劇場、びわ湖ホールなど数々のオペラ公演に出演。ソリストとしても卓越した歌唱に定評があり、小澤征爾、大野和士、チョン・ミョンフンらの指揮のもとオーケストラと共演を重ねている。東京藝術大学音楽学部教授。2016年秋、日伊の名歌曲を集めたCD『プロープリオ』（フォンテック）をリリース。

Hiroyuki Yoshida has a wide range of repertoire and always attracts audiences with his fresh and beautiful voice and lyrical expression. He has appeared many opera performances at New National Theatre, Tokyo, Nissay Theatre, and Biwako Hall, among others. He has also been noted for his prominent singing as a soloist and appeared with conductors such as Seiji Ozawa, Kazushi Ono and Myung-Whun Chung. He is a professor of Tokyo University of the Arts.

Baritone

Dietrich HENSCHEL

バリトン

ディートリヒ・ヘンシェル

©Susanne Diesner

リヨン、ベルリン、ミュンヘン、アムステルダム、ブリュッセル、リスボン、マドリード、ジュネーヴ、パリなど各地の歌劇場、音楽祭に出演、著名指揮者と共演多数。バロック・オペラから現代曲まで幅広いレパートリーを誇り、リート歌手としての評価も極めて高い。近年は映像と歌曲を融合させるプロジェクトにも取り組み、『IRRSAL (狂気の－禁じられた祈祷者たち) 』『WUNDERHORN (不思議な角笛) 』などが話題を呼んでいる。

The bariton Dietrich Henschel is a singer whose repertoire extends from early baroque operas to modern-day avant-garde works. He is also an excellent singer for lieder. Henschel has appeared opera houses and music festivals in Lyon, Berlin, München, Amsterdam, Bruxelles, Lisbon, Madrid, Genève, and Paris, among others. In recent years, his film project “IRRSAL” and “WUNDERHORN” have achieved acclaim.

1925年創設。1952年、“合唱の神様”エリック・エリクソンが首席指揮者に就任以来、世界のトップ・アンサンブルとしての地位を確立。2007年ペーター・ダイクストラが首席指揮者に就任。ゲルギエフ、ブロムシュテット、ムーティらの指揮で、スウェーデン放送響、ミラノ・スカラ座フィルなどと共演。ベルリン・フィルとは厚い信頼で結ばれており、アバドの要請で演奏会や録音に出演、1996年来日公演の《第九》《復活》では大絶賛を博した。都響とは、2015年10月以来2度目の共演。

Swedish Radio Choir was founded in 1925, but it was only in 1952 that the newly appointed chief conductor Eric Ericson set about moulding it into the flexible choral instrument that still remains today. In 2007 Peter Dijkstra was appointed chief conductor for the choir. They have sung with orchestras such as Berliner Philharmoniker and Swedish Radio Symphony under batons of Abbado, Gergiev, Blomstedt, and Muti.

1978年、オランダ生まれ。2005〜16年にバイエルン放送合唱団芸術監督を務めた。現在、スウェーデン放送合唱団首席指揮者、オランダ室内合唱団首席指揮者、声楽アンサンブルMUSA芸術監督、声楽アンサンブルThe Gents客演指揮者を務めている。BBCシンガーズ、デンマーク国立合唱団、ベルリン放送合唱団などのほか、バイエルン放送響、スウェーデン放送響、ベルリン・ドイツ響などオーケストラの指揮者としても高く評価されている。

Peter Dijkstra was born in Netherlands in 1978. Between 2005-16 he was Artistic Director of Chor des Bayerischen Rundfunks. Currently, Dijkstra is Chief Conductor of Swedish Radio Choir, Chief Conductor of Netherlands Chamber Choir, Artistic Leader of vocal ensemble MUSA and First Guest Conductor of vocal ensemble The Gents. He is regularly invited to choirs such as BBC singers and Rundfunkchor Berlin, and orchestras such as Symphonieorchester des Bayerischen Rundfunks, Swedish Radio Symphony and Deutsches Symphonie-Orchester Berlin.

ハイドン：
オラトリオ《天地創造》Hob.XXI:2

作曲のきっかけはヘンデル

ヨーゼフ・ハイドン（1732 ～ 1809）は晩年になってオラトリオの大作を2つ生み出した。《天地創造》《四季》である。彼がこの時期にオラトリオを手掛けたきっかけは、1791年にロンドンでゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル〔彼は英国へ帰化したので、英語風の発音ではジョージ・フレデリック・ハンデル〕（1685 ～ 1759）のオラトリオを聴いて、大きな感銘を受けたことにあった。自分もこうしたオラトリオを書きたいと強く思ったハイドンは、まず聖書を題材にした作品の創作を考える。

実際にその構想が実現に向けてスタートするのは、２度目の長期ロンドン滞在を終えた1795年からになる。この年ロンドンからウィーンに戻る際に持ち帰った《天地創造》の英語台本がその出発点となった。現在は失われてしまったこの台本の作者は明らかでない。イギリス人のリドレーもしくはリンリィの作と伝えられてきたが特定できておらず、本来ヘンデルのために作られたともいわれ、ヘンデルのオラトリオの台本作者チャールズ・ジェネンズ（1700 ～ 73）の作とする説も出されている。

ハイドンはこの台本に基づくドイツ語台本の作成をゴットフリート・ヴァン・スヴィーテン男爵（1733 ～ 1803）に依頼した。ウィーンの宮廷図書館長も務めた博雅の士ヴァン・スヴィーテン男爵（当時忘れられていたバロック音楽をウィーンの貴族や音楽家に広く紹介した役割は大きい）は、単に元の英語台本を独訳するのでなく、様々な改変の手を入れて、より内容に奥行きを与えていった。台本の手稿には音楽表現についての提案も書き込まれており、ハイドンはそのアイデアの幾つかを取り入れている。

台本は『旧約聖書』の“創世記”や“詩篇”、イギリスの詩人ジョン・ミルトン（1608 ～ 74）の『失楽園』などに基づいており、三天使すなわちガブリエル（ソプラノ）、ウリエル（テノール）、ラファエル（バス）が神による6日間の天地創造を語る第1部と第2部、楽園におけるアダム（バス）とエヴァ（ソプラノ）を扱う第3部からなる。

作曲は主に1796年から98年初めにかけてなされた。こうして出来上がった作品は、ヘンデルの劇的で雄弁な様式やバロック的な書法を吸収しつつ、そこに自ら発展に大きく関わってきた、いわゆる古典派の書法と、声楽的・器楽的語法を融合させたハイドン独自のオラトリオ様式を示すものとなった。言葉の内容の具体的な音画的描写、天使の語る第1～2部の宗教音楽的な崇高さと、アダムおよびエヴァを扱う第3部の民俗調の世俗的曲想との対比など、台本に即した音楽表現は見事という他ない。随所にヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756 ～ 91）の『魔笛』の影響と思われる音調が窺える点も注目すべきだろう。

大編成で行われた初演

私的初演は1798年４月30日ウィーンのシュヴァルツェンベルク宮においてハイドンの指揮でなされた（前日に試演もなされている）。外国人も含む貴族を中心とした聴衆相手の演奏会だったが、大変な評判を呼び、さらに何回かの追加公演が続いた。

そして公的初演は1799年３月19日ウィーンのブルク劇場でやはりハイドン自身の指揮（当時はまだ一般的ではなかった指揮棒を使用）で行われている。この時は木管とホルンが本来の３倍、金管とティンパニは２倍に増員され、当初はなかったバストロンボーンとコントラファゴットが追加されるとともに、弦も大人数（ヴァイオリンは対向配置、コントラバスは両翼に分かれた）が参加し、総勢実に180ないし200名ほどの大編成で行われた。配置も興味深く、中央の指揮者を囲んで管弦楽が扇状のひな壇に半円形に並ぶ一方、声楽陣と通奏低音は指揮者の手前に配された。

注目すべきはホルンと木管で、基本の各２管の群（第１群）が管楽器の第１列に並び、その後ろに、第１群を部分的に重ねる第２群、第３群が第１群と同様の並びで２列配置され、さらにその後列（最上段）に左からトランペット、ティンパニ、トロンボーンが陣取ったようだ。

この初演は圧倒的な成功を収め、演奏終了後は大喝采とともに聴衆の「パパ・ハイドンよ永遠なれ、音楽よ永遠なれ」という叫び声がホールを満たしたという。

オックスフォード版

本日はピーター・ブラウン校訂のオックスフォード版楽譜が用いられるが、1995年に出されたこの版はハイドン自身が演奏に用いた楽譜などの資料をもとに、上記の初演の形態を可能な限り具現化することを意図したものである。特に倍管の扱いについては、スコア上に木管とホルンの第２、３群、金管の第２群を重ねる箇所をローマ数字で示すなどの工夫がみられる。

今回の都響の演奏は倍管にすることなく、あくまで２管編成での演奏ということなので、部分的に響きの厚みが増す効果は望めないが、例えば第１曲の金管とティンパニに他の版にない弱音器の指示がみられるなど、この版ならではの響きは随所で味わえよう。

ハイドン自身は初演の形が最終形態と考えていたわけでなく、その後1800年の初版出版に向けて数々の改訂を施している。旧全集はじめ従来の多くの版はこの初版に基づいて作られたものだが、誤りや後世の加筆も含むものだった。2009年になって、初演後のハイドンの改訂を重視しつつ、初演時を含めた様々な資料に基づいて総合的に校訂された新全集版（アネッテ・オッペルマン校訂）が出され、おそらくそれを用いた演奏が今後は主流となると思われるが、初演時の作品のあり方にこだわったオックスフォード版も独自の価値を持つものとして取り上げられていくことだろう。

なお以下の解説の曲番（場の区分けも含む）はオックスフォード版によるもので、他の版とは異なるものであることをお断りしておく。

第1部

第1曲“序曲　混沌の表象”　ラルゴ　ハ短調　管弦楽のハ音の総奏に始まり、調的にきわめて不安定な和声の動きによって、天地創造以前の混沌が描かれる。

第1場

第2曲　神による天と地の分割を告げるラファエルの叙唱。続いて霊が漂っていることを合唱が神秘的な音調で囁き、光が現れると述べると、突如ハ長調の総奏の和音が朗々と鳴り響いて光の出現を劇的に描写、神が闇から光を分けたことをウリエルが叙唱で語る。

第3曲　アンダンテ　イ長調　ウリエルのアリアで、光のもたらす秩序の世界が明るく歌われた後、地獄の霊に触れる部分ではハ短調（楽譜上の調号はイ長調のまま）のアレグロ・モデラートによる落ち着かない曲想に転じ、合唱がフガート風に加わって緊張を作り出す。しかしすぐにイ長調に回帰、ホモフォニックに“新しい世界”を歌い上げる。

第2場

第4曲　神が空とその上および下にある水を分割することを述べるラファエルの管弦楽付き叙唱。嵐、閃光、雷鳴、雨、雪などを管弦楽が巧みに音描写する。

第5曲　アレグロ・モデラート　ハ長調　天使の軍団が神の第2日の御業に驚嘆していることをガブリエルが清澄に歌い、合唱による讃歌が呼応する。

第3場

第6曲　神による海と陸の分割を告げるラファエルの叙唱。

第7曲　アレグロ・アッサイ　ニ短調　ラファエルのアリア。荒れた海や険しい山、平野を曲がりながら流れる河、澄んだ小川（穏やかなニ長調に転じる）などがそれぞれに相応しい楽想で示され、“静かな谷”の語では歌唱も低い音域に降りるなど、描写的な工夫が様々になされている。

第8曲　草木の創造を述べるガブリエルの叙唱。

第9曲　アンダンテ　変ロ長調　沃野の緑や草花、黄金色の果実、林や森の情景を穏やかなシチリアーノのリズムで歌い上げるガブリエルの美しいアリア。バロックのパストラール・アリア様式の曲で、形式的にはＡＢＡ構成をとり、随所にアジリタ（コロラトゥーラ）の技巧が生かされている。

第10曲　次曲を導くウリエルの短い叙唱。

第11曲　ヴィヴァーチェ　ニ長調　第3日の神の御業を讃える活力に満ちた合唱曲で、ホモフォニックに始まるが、ほどなくフーガとなって大きな盛り上がりを作る。

第4場

第12曲　昼と夜、天体の創造を告げるウリエルの叙唱。

第13曲　管弦楽付きのウリエルの叙唱。まずアンダンテ、ppからクレッシェンドでニ長調の音階を上昇してffの総奏に至る、管弦楽による日の出の描写に始まる。月を語る箇所ではピウ･アダージョに転じ、弦のひそやかな響きが生かされる。

第14曲　アレグロ　ハ長調　第４日の神の御業を壮麗に讃える合唱曲で、三天使の三重唱（昼を明るい長調、夜を短調の弱音で対比）を挟みつつ、大きな高揚を生み出しながら第1部を締め括る。

第2部

第1場

第15曲　水の生き物と空飛ぶ鳥の誕生をガブリエルが語る管弦楽付き叙唱。

第16曲　モデラート　ヘ長調　様々な鳥について歌うガブリエルの長大かつ技巧的な美しいアリアで、鳥の声や鳥の様子の描写が絶妙に織り込まれる。

第17曲　ラファエルが叙唱で鯨とあらゆる生き物が創造されたことを語り、さらにヴィオラ、チェロ、コントラバスの重々しい伴奏を背景に、生き物たちに産めよ増やせよと求める神の言葉を伝える。

第18曲　次曲の天使たちの歌を導くラファエルの短い叙唱。

第19曲　イ長調　前半はモデラートで、ガブリエル、ウリエル、ラファエルの順でそれぞれ様々な被創造物の姿を歌った後、神への問いかけ（フェルマータ、休符が効果的）の三重唱となる。一転ヴィヴァーチェとなる後半では、三天使に導かれて合唱が加わり、濃やかなポリフォニックの綾を織りなしつつ、神の偉大な力を高らかに歌い上げる。

第2場

第20曲　生き物がそれぞれの種に従って生まれ出よと求める神の言葉を告げるラファエルの叙唱。

第21曲　ラファエルが様々な動物の姿を語っていくプレストの管弦楽伴奏付き叙唱。各動物を管弦楽で音描写する手法は鮮やかという他ない。

第22曲　アレグロ・マエストーソ　ニ長調　大地や生き物たちに思いを巡らせながらも、神の善を讃える被造物（人間）がまだ欠けていることを歌うラファエルの荘重なアリアで、威厳さを添える金管が巧みに生かされている。“神の御業（みわざ）を感謝とともにかえりみるもの、主の善を称えるべきあの被造物が欠けていては”の語句が執拗に繰り返されて強調される。

第23曲　神が自分の姿に似せて人間を創り出し、生命を吹き込んだことをウリエルが語る叙唱。

第24曲　アンダンテ　ハ長調　ウリエルのアリアで、前半は人間の男を“自然界の王”としてリズミックな堂々とした響きで示し、女について歌う後半は、前半と同じ旋律で始まりながらも、チェロの伸びやかな対旋律など優美な発展をみせる。

第25曲　全ての創造の成就を述べるラファエルの叙唱。

第26曲　ヴィヴァーチェ　変ロ長調　神の御業の完了を歌う活力に満ちた合唱の後、三天使の三重唱（ポーコ・アダージョ、変ホ長調）となり、ガブリエルとウリエルが室内楽的な管楽合奏を背景に神が万物に与える糧について幸福感に満ちて語るのに続き、ひそやかな弦とともにラファエルが神に見放されると生も朽ち果てることを神妙に説く。そして三者が新しい命について唱和した後、先の合唱が回帰し、壮大な二重フーガへと発展、アレルヤの高唱のうちに第２部を締め括る。

第３部

第1場

第27曲　ラルゴ　ホ長調　牧歌的な３つのフルート（第３フルートの出番はこの曲のみ）およびホルンと弦の響きが平和なエデンの園を映し出す。続いてウリエルが園の情景とそこを歩くアダムとエヴァの様子を管弦楽伴奏付きの叙唱で語る。

第2場

第28曲　前半はアダージョ、ハ長調で、ゆっくり歩むような運びのうちにアダムとエヴァが神の創られた世界を賛美し、途中から神を祝福する合唱が重ねられる。後半はアレグレット、ヘ長調の舞曲調の音楽に転じ、アダムとエヴァそして合唱が歌い交わしつつ、万物に神を讃えるよう呼びかける。この後半部分は主題をロンド風に回帰させつつ、転調を重ねて自由な発展をみせ、最後はハ長調の輝かしい合唱で閉じられる。

第3場

第29曲　神に感謝し、エヴァを導いていくことを語るアダムと、それを受け入れることは喜びで誉れであると応えるエヴァの叙唱。

第30曲　アダージョ～アレグロ　変ホ長調　アダムとエヴァの二重唱。前半は穏やかな旋律で愛の喜びをしっとりと歌い上げ、後半はコントルダンス風の軽快さで喜びの高まりを朗らかに表現する。

最終場

第31曲　幸せなカップルを祝福しつつもそこに警告も含ませたウリエルの叙唱。

第32曲　変ロ長調　神を賛美するよう呼びかける壮麗な合唱曲。アンダンテのホモフォニックな合唱で荘厳に開始された後、アレグロに転じて自由なフーガが発展、独唱群（ここのみアルト独唱が加わる）のアジリタの一節も挟みながら高揚を示しつつ、最後はアーメンと高らかに唱和し全曲を閉じる。

（寺西基之）

作曲年代：1796～98年

初　　演：私的初演／1798年４月30日　ウィーン　シュヴァルツェンベルク宮
公的初演／1799年３月19日　ウィーン　ブルク劇場　いずれも作曲者指揮

楽器編成：フルート３、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、コントラファゴット、ホルン２、トランペット２、トロンボーン３、ティンパニ、フォルテピアノ、弦楽５部、独唱３（ソプラノ、テノール、バス）、混声４部合唱

東京都交響楽団 札幌特別公演

TMSO Special Concert in Sapporo

TMSO

札幌コンサートホールKitara

2017年9月18日(月・祝) 14:00開演

Mon. 18 September 2017, 14:00 at Sapporo Concert Hall Kitara

指揮 ● 大野和士 ONO Kazushi, Conductor
ヴァイオリン ● パク・ヘユン Hyeyoon PARK,Violin
オルガン ● 室住素子 MUROZUMI Motoko,Organ
コンサートマスター ● 矢部達哉 YABE Tatsuya, Concertmaster

ワーグナー：歌劇『ローエングリン』第3幕への前奏曲 (3分)

Wagner: Prelude to Act 3 from “Lohengrin”

シベリウス：ヴァイオリン協奏曲 ニ短調 op.47 (34分)

Sibelius: Violin Concerto in D Minor, op. 47

Ⅰ Allegro moderato
Ⅱ Adagio di molto
Ⅲ Allegro, ma non tanto

休憩 / Intermission (20 分)

サン＝サーンス：交響曲第3番 ハ短調 op.78 《オルガン付》 (37分)

Saint-Saëns: Symphony No. 3 in C Minor, op. 78, "Organ"

Ⅰ Adagio - Allegro moderato
Poco adagio

Ⅱ Allegro moderato
Maestoso - Allegro

主催：公益財団法人東京都交響楽団

特別協力：HTB

協力：公益財団法人札幌交響楽団

後援：札幌市、札幌市教育委員会、北海道新聞社

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

お願い 演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

Violin

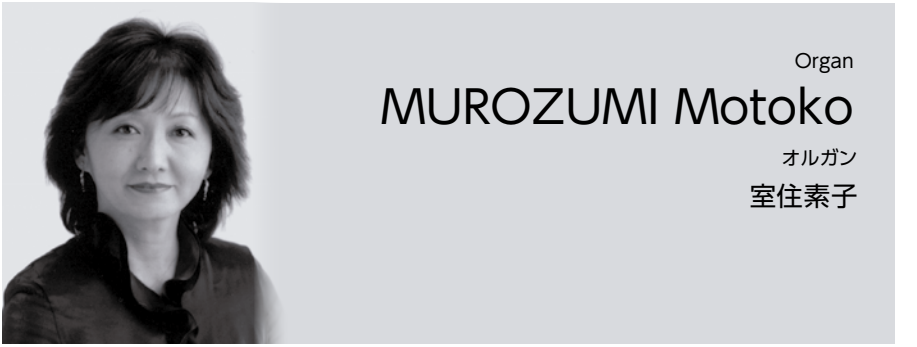
Hyeyoon PARK

ヴァイオリン

パク・ヘユン

1992年ソウル生まれ。2009年ミュンヘン国際音楽コンクールに史上最年少17歳で優勝。9歳にしてソウル・フィルとの共演でオーケストラ・デビュー、その後バイエルン、シュトゥットガルト、ハンブルク、ライプツィヒの各放送響、ベルリン・ドイツ響、マリインスキー劇場管、モントリオール響などと共演。欧米各地の音楽祭からも度々招かれ、クレーメル、シフ、フォークト、バシュメットらと共演を重ねている。N響、読響、東響、名古屋フィルにもデビューしている。

Hyeyoon Park was born in 1992 in Seoul. In 2009, she was the youngest ever 1st prize winner of Internationaler Musikwettbewerb der ARD. Park has performed with orchestras including Symphonieorchester des Bayerischen Rundfunks, Radio-Sinfonieorchester Stuttgart des SWR, NDR Elbphilharmonie Orchester, MDR Sinfonieorchester, Deutsches Symphonie-Orchester Berlin, Mariinsky Orchestra, and Orchestre symphonique de Montréal. She has collaborated with Kremer, Schiff, Vogt, and Bashmet, among others.



Organ

MUROZUMI Motoko

オルガン

室住素子

室蘭出身。東京大学文学部美学芸術学科を経て、東京藝術大学音楽学部器楽科（オルガン専攻）卒業、同大学院修士課程修了。安宅賞受賞。1989～97年、水戸芸術館音楽部門主任学芸員を務め、吉田秀和館長賞受賞。都響とは、フルネとの《オルガン付》、ベルティーニやインバルによるマーラー・シリーズなどで共演、ほかに新日本フィル、N響、サイトウ・キネン・オーケストラなど共演多数。日本オルガニスト協会会員。

After graduating from Department of Aesthetics of Tokyo University, Motoko Murozumi studied organ at Tokyo University of the Arts and obtained a master's degree at the same university. From 1989 to 1997, she served as a chief curator of Department of Music of Art Tower Mito. She was awarded Hidekazu Yoshida Director Prize. She is a member of Japan Association of Organists.

ワーグナー：
歌劇『ローエングリン』第3幕への前奏曲

リヒャルト・ワーグナー（1813～83）は、若き日にドイツ語圏の歌劇場を転々としながら指揮者としてのキャリアを積み、作曲を続けた。生活は窮乏をきわめ、借金から逃れるように20代後半の3年ほどをパリで過ごす。そこで脚光を浴びることはなかったが、1842年（29歳）に歌劇『リエンツィ』初演がドレスデン宮廷歌劇場で大成功。翌年、同歌劇場の指揮者に就任、1849年まで務めることとなる。

歌劇『ローエングリン』は、パリ時代に構想が生まれ、台本執筆と作曲はドレスデンでなされた、ワーグナーの前期を締めくくる作品である。作曲者は「3幕のロマンティック・オペラ」と呼んだが、ライトモティーフ（示導動機）を活用して劇と音楽を有機的に統合するなど、総合芸術としての「楽劇」（ワーグナー自身はこの言葉を好まなかったが）様式は高い完成度に至っている。

物語は、イエス・キリストが最後の晩餐で用いた聖杯（十字架上のキリストの血を受けた杯とも言われる）とそれを守る騎士たちを描いた中世の「聖杯騎士伝説」をはじめ、いくつかの叙事詩に基づいている。

舞台は10世紀初頭のアントウェルペン（アントワープ）。騎士ローエングリンは、弟殺しの嫌疑をかけられている王女エルザを救うため現れるが、自らの名を尋ねることをエルザにかたく禁じる。聖杯の騎士は名と素性が明らかになると霊力を失い、聖杯を守護する城へ帰らねばならないからであった（第1幕）。エルザは騎士との婚礼の場へ向かうが、魔女オルトルートに騎士への疑念を吹きこまれてしまう（第2幕）。エルザは遂に不問の誓いを破ってしまい、ローエングリンは自らの名と素性を一同の前で明かすと、エルザのもとを去っていく。彼女は放心状態のうちに倒れる（第3幕）。

第3幕への前奏曲は、ワーグナーの管弦楽作品のなかでも演奏機会の多い人気作。騎士を象徴するホルンを中心に、全オーケストラが高らかに主題を奏でて始まる。中間部では管楽器と弦楽器が伸びやかに歌い交わし、すぐに主部の主題に回帰する。前幕の婚礼を象徴する高揚した雰囲気に満ちた、堂々としたきらびやかな曲想が特徴である。

（鉢村 優）

作曲年代：1846～48年
初　　演：オペラ全曲／1850年8月28日　フランツ・リスト指揮　ワイマール宮廷歌劇場
楽器編成：フルート3、オーボエ3、クラリネット3、ファゴット3、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、トライアングル、シンバル、タンブリン、弦楽5部

シベリウス：
ヴァイオリン協奏曲 ニ短調 op.47

“国民的大作曲家”の称号は、他の誰よりもジャン・シベリウス（1865～1957）に似つかわしい。フィンランドと聞いて思い描く“森と湖の国”という言葉そのものの、冷涼たる空気感をたたえた旋律と和声。そこから醸し出される叙情味や田園情緒。北欧神話の登場人物を思い浮かべずにはいられない叙事性。厳しくも神秘的な北国の自然を象徴する、ときに豪壮無類で、ときに深遠な響き……。こうした要素が様々な形で融合を遂げながら、彼固有の世界を築き上げていく。

シベリウスのヴァイオリン協奏曲は、成立の時期からすると交響曲第２番（1901年）と第３番（1907年）の間に位置している。彼の個性的な音楽語法が大幅な深化を遂げた時期の所産だ。1903年にいったん作品は完成するが、しかし翌年の初演は不評。そこで指摘された“冗長な面”を排し、独奏パートと管弦楽のシンフォニックな一体感も重視した改訂稿が1905年に編まれ、再演の場で大成功を収めた。この形で初版譜も刊行され、傑作としての揺るぎない地位を得て今日に至っている。

ちなみにヴァイオリンはシベリウスが幼年時から親しみ、相当に高度な技量も身につけた楽器だ。しかし本格的なレッスンに通い始めたのが14歳という事情も手伝い、プロとして身を立てるには限界もあった。ベルリンやウィーンへ留学中の1880年代末から1890年代初頭の時点で断念し、作曲の道を選ぶ。我々にとっては幸いだったが（！）、後の1910年になっても「本当にヴィルトゥオーソを夢見ていたのだ」と述懐していたほどだから、若き日に覚えた挫折感は思いのほか深かったらしい。

第1楽章（アレグロ・モデラート）は、3つの対照的な主題を用いたソナタ形式。風にそよぐ針葉樹林のような弦楽器の音形にのって独奏ヴァイオリンが導入する第1主題を、シベリウスは「澄みわたる極寒の空を悠然と舞う鷲」になぞらえた。第2主題は大きな波のうねりを思わせ、木管楽器が背景で奏でる上昇音形楽句も従えながら、独奏ヴァイオリンが重音奏法も交えて熱っぽく歌う。テンポを速めた第3主題で発散される力感もシベリウス一流のもの。カデンツァが楽章の中央部に位置するのは形式的に大胆な試みだ。その点のみをとればチャイコフスキー（1840～93）のヴァイオリン協奏曲も同様だが、シベリウスの場合はカデンツァに事実上の展開部の役割を担わせ、音楽的な求心力を高めたところが非凡なアイデアである。

第2楽章（アダージョ・ディ・モルト）は、独奏ヴァイオリンと管弦楽によるバラードさながらの装い。木管楽器による導入楽句に続き、低音域を主体としてソロイストが息長く主題を弾き連ねる。中間部は劇的に高揚し、やがて回帰する主題もいきおい憧憬の念を増す。

第3楽章（アレグロ、マ・ノン・タント）は躍動的にして野性味すら漂うリズムが一貫する中で、2つの主題が順次交替しながら進むロンド。シベリウスより10歳年下にあたるイギリスの評論家ドナルド・フランシス・トーヴィー（1875～1940）は、この楽章を「白熊の踊るポロネーズ」と評したが、実に言い得て妙ではないだろうか。

（木幡一誠）

作曲年代：1903年　改訂／1905年
初　　演：初稿／1904年２月8日　ヘルシンキ
　　ヴィクトル・ノヴァチェク独奏　作曲者指揮
　改訂稿／1905年10月19日　ベルリン
　　カレル・ハリール独奏　リヒャルト・シュトラウス指揮
楽器編成：フルート２、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、ホルン４、トランペット２、トロンボーン３、ティンパニ、弦楽５部、独奏ヴァイオリン

サン＝サーンス：交響曲第3番 ハ短調 op.78《オルガン付》

作曲家としては楽壇を牽引する立役者。ピアノやオルガンは超一流の腕前。おまけに詩作や数学や自然科学の分野でも玄人はだし。シャルル・カミーユ・サン＝サーンス（1835～1921）こそは、往時のフランスきっての“総合的文化人”だった。おなじみの組曲《動物の謝肉祭》が、持ち前の知性とユーモアとエレガンスを寛いだ形で伝えるものだとすれば、同じ1886年に生まれた交響曲第３番は、彼のシリアスな面を何よりも雄弁に示す傑作である。

曲はロンドンのフィルハーモニック協会の委嘱によって書かれ、完成後にはサン＝サーンス自身が「持てるもの全部をつぎこんだ。これほどの達成感はもう得られまい」と語っている。そして実際、彼がこのジャンルに舞い戻ることは二度となかったし、盛り込まれた着想は確かに多彩を極める。

まず耳にも明らかなのは、副題の由来でもあるオルガン、そしてピアノまで用いて、オーケストラの音色のパレットを広げたこと。次に構成原理として導入された“循環主題”という手法。作品の核をなす主題が絶えず変容を伴いながら登場して音楽の流れを導く書式は、リスト（1811～86）の交響詩、ひいてはワーグナー（1813～83）の楽劇と共通点を持つ。それを標題音楽や舞台作品ではなく、交響曲にサン＝サーンスは応用したわけである。その点で大きな影響を受けたリストに、サン＝サーンスがこの曲を献呈しようと思い立ったのも納得のいく話だ。彼の申し出は感謝の返事とともに首尾よく受理されたのだが、しかしそのリストは初演から２ヵ月後の1886年７月に世を去ってしまい、初版譜の刊行時には「フランツ・リス

トの思い出に捧げて」という言葉が掲げられることとなった。

さらには形式面もユニーク。従来の交響曲の枠組に沿いながらも、以下のとおり、それぞれ対照的な図式を描く2楽章構成に作品がまとめられている。

第1楽章　前半部は**“アダージョ”**の短い序奏と、ソナタ形式の**“アレグロ・モデラート”**からなる。後者に入ってすぐ弦楽器の奏でる第1主題が、全曲に波及する循環主題である（最初のうちは細かくリズムを分割し、本来の姿を曖昧にしか見せない巧妙な筆さばき）。そこに序奏の動機が対置されていく。波打つような動きの第2主題は木管楽器が提示。各主題の展開と再現を経て次第に音勢が弱まると、オルガンがペダル音を含むハーモニーで静かに登場し、後半部**“ポコ・アダージョ”**が開始。これは緩徐楽章にあたり、それまで抱えていた内面の相克に宗教的浄化が与えられていくような趣だ。

第2楽章　前半部はスケルツォに相当。循環主題も活用した**“アレグロ・モデラート”**と、快活にして色彩感も豊かな**“プレスト”**が交替する形で進む。後者が2度目に現れると、新しい重要なモチーフを用いた静かな推移句へと流れ込む。続く後半部は、まず**“マエストーソ”**のテンポにより、オルガンの輝かしいコードを伴いながら祝典的なムードで幕を開ける。**“アレグロ”**に転じてからは循環主題も確信に満ちた表情で歩を進め、先行楽章の動機群も様々な形で回帰を果たす。すべての不安を払拭した後のコーダで待ち受けているのは、壮麗無比なクライマックス。

（木幡一誠）

作曲年代：1886年

初　　演：1886年5月19日　ロンドン　作曲者指揮

楽器編成：フルート3（第3はピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、シンバル、大太鼓、トライアングル、オルガン、ピアノ（連弾）、弦楽5部

Violin

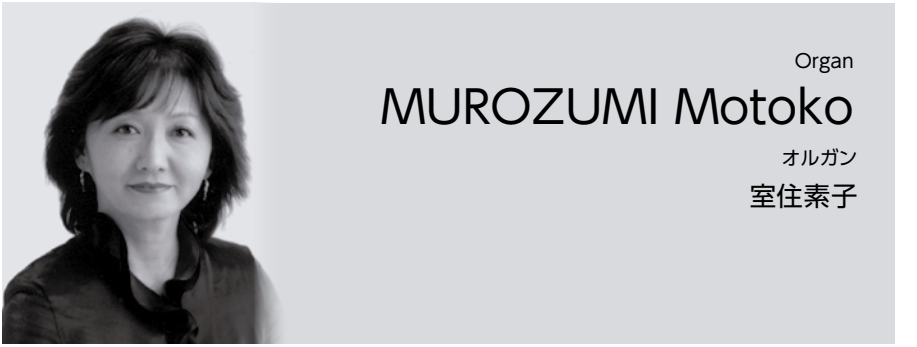
Hyeyoon PARK

ヴァイオリン

パク・ヘユン

1992年ソウル生まれ。2009年ミュンヘン国際音楽コンクールに史上最年少17歳で優勝。9歳にしてソウル・フィルとの共演でオーケストラ・デビュー、その後バイエルン、シュトゥットガルト、ハンブルク、ライプツィヒの各放送響、ベルリン・ドイツ響、マリインスキー劇場管、モントリオール響などと共演。欧米各地の音楽祭からも度々招かれ、クレーメル、シフ、フォークト、バシュメットらと共演を重ねている。N響、読響、東響、名古屋フィルにもデビューしている。

Hyeyoon Park was born in 1992 in Seoul. In 2009, she was the youngest ever 1st prize winner of Internationaler Musikwettbewerb der ARD. Park has performed with orchestras including Symphonieorchester des Bayerischen Rundfunks, Radio-Sinfonieorchester Stuttgart des SWR, NDR Elbphilharmonie Orchester, MDR Sinfonieorchester, Deutsches Symphonie-Orchester Berlin, Mariinsky Orchestra, and Orchestre symphonique de Montréal. She has collaborated with Kremer, Schiff, Vogt, and Bashmet, among others.



Organ

MUROZUMI Motoko

オルガン

室住素子

室蘭出身。東京大学文学部美学芸術学科を経て、東京藝術大学音楽学部器楽科（オルガン専攻）卒業、同大学院修士課程修了。安宅賞受賞。1989～97年、水戸芸術館音楽部門主任学芸員を務め、吉田秀和館長賞受賞。都響とは、フルネとの《オルガン付》、ベルティーニやインバルによるマーラー・シリーズなどで共演、ほかに新日本フィル、N響、サイトウ・キネン・オーケストラなど共演多数。日本オルガニスト協会会員。

After graduating from Department of Aesthetics of Tokyo University, Motoko Murozumi studied organ at Tokyo University of the Arts and obtained a master's degree at the same university. From 1989 to 1997, she served as a chief curator of Department of Music of Art Tower Mito. She was awarded Hidekazu Yoshida Director Prize. She is a member of Japan Association of Organists.

ワーグナー：
歌劇『ローエングリン』第3幕への前奏曲

リヒャルト・ワーグナー（1813～83）は、若き日にドイツ語圏の歌劇場を転々としながら指揮者としてのキャリアを積み、作曲を続けた。生活は窮乏をきわめ、借金から逃れるように20代後半の3年ほどをパリで過ごす。そこで脚光を浴びることはなかったが、1842年（29歳）に歌劇『リエンツィ』初演がドレスデン宮廷歌劇場で大成功。翌年、同歌劇場の指揮者に就任、1849年まで務めることとなる。

歌劇『ローエングリン』は、パリ時代に構想が生まれ、台本執筆と作曲はドレスデンでなされた、ワーグナーの前期を締めくくる作品である。作曲者は「3幕のロマンティック・オペラ」と呼んだが、ライトモティーフ（示導動機）を活用して劇と音楽を有機的に統合するなど、総合芸術としての「楽劇」（ワーグナー自身はこの言葉を好まなかったが）様式は高い完成度に至っている。

物語は、イエス・キリストが最後の晩餐で用いた聖杯（十字架上のキリストの血を受けた杯とも言われる）とそれを守る騎士たちを描いた中世の「聖杯騎士伝説」をはじめ、いくつかの叙事詩に基づいている。

舞台は10世紀初頭のアントウェルペン（アントワープ）。騎士ローエングリンは、弟殺しの嫌疑をかけられている王女エルザを救うため現れるが、自らの名を尋ねることをエルザにかたく禁じる。聖杯の騎士は名と素性が明らかになると霊力を失い、聖杯を守護する城へ帰らねばならないからであった（第1幕）。エルザは騎士との婚礼の場へ向かうが、魔女オルトルートに騎士への疑念を吹きこまれてしまう（第2幕）。エルザは遂に不問の誓いを破ってしまい、ローエングリンは自らの名と素性を一同の前で明かすと、エルザのもとを去っていく。彼女は放心状態のうちに倒れる（第3幕）。

第3幕への前奏曲は、ワーグナーの管弦楽作品のなかでも演奏機会の多い人気作。騎士を象徴するホルンを中心に、全オーケストラが高らかに主題を奏でて始まる。中間部では管楽器と弦楽器が伸びやかに歌い交わし、すぐに主部の主題に回帰する。前幕の婚礼を象徴する高揚した雰囲気に満ちた、堂々としたきらびやかな曲想が特徴である。

（鉢村 優）

作曲年代：1846～48年
初　　演：オペラ全曲／1850年8月28日　フランツ・リスト指揮　ワイマール宮廷歌劇場
楽器編成：フルート3、オーボエ3、クラリネット3、ファゴット3、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、トライアングル、シンバル、タンブリン、弦楽5部

シベリウス：
ヴァイオリン協奏曲 ニ短調 op.47

“国民的大作曲家”の称号は、他の誰よりもジャン・シベリウス（1865～1957）に似つかわしい。フィンランドと聞いて思い描く“森と湖の国”という言葉そのものの、冷涼たる空気感をたたえた旋律と和声。そこから醸し出される叙情味や田園情緒。北欧神話の登場人物を思い浮かべずにはいられない叙事性。厳しくも神秘的な北国の自然を象徴する、ときに豪壮無類で、ときに深遠な響き……。こうした要素が様々な形で融合を遂げながら、彼固有の世界を築き上げていく。

シベリウスのヴァイオリン協奏曲は、成立の時期からすると交響曲第２番（1901年）と第３番（1907年）の間に位置している。彼の個性的な音楽語法が大幅な深化を遂げた時期の所産だ。1903年にいったん作品は完成するが、しかし翌年の初演は不評。そこで指摘された“冗長な面”を排し、独奏パートと管弦楽のシンフォニックな一体感も重視した改訂稿が1905年に編まれ、再演の場で大成功を収めた。この形で初版譜も刊行され、傑作としての揺るぎない地位を得て今日に至っている。

ちなみにヴァイオリンはシベリウスが幼年時から親しみ、相当に高度な技量も身につけた楽器だ。しかし本格的なレッスンに通い始めたのが14歳という事情も手伝い、プロとして身を立てるには限界もあった。ベルリンやウィーンへ留学中の1880年代末から1890年代初頭の時点で断念し、作曲の道を選ぶ。我々にとっては幸いだったが（！）、後の1910年になっても「本当にヴィルトゥオーソを夢見ていたのだ」と述懐していたほどだから、若き日に覚えた挫折感は思いのほか深かったらしい。

第1楽章（アレグロ・モデラート）は、3つの対照的な主題を用いたソナタ形式。風にそよぐ針葉樹林のような弦楽器の音形にのって独奏ヴァイオリンが導入する第1主題を、シベリウスは「澄みわたる極寒の空を悠然と舞う鷲」になぞらえた。第2主題は大きな波のうねりを思わせ、木管楽器が背景で奏でる上昇音形楽句も従えながら、独奏ヴァイオリンが重音奏法も交えて熱っぽく歌う。テンポを速めた第3主題で発散される力感もシベリウス一流のもの。カデンツァが楽章の中央部に位置するのは形式的に大胆な試みだ。その点のみをとればチャイコフスキー（1840～93）のヴァイオリン協奏曲も同様だが、シベリウスの場合はカデンツァに事実上の展開部の役割を担わせ、音楽的な求心力を高めたところが非凡なアイデアである。

第2楽章（アダージョ・ディ・モルト）は、独奏ヴァイオリンと管弦楽によるバラードさながらの装い。木管楽器による導入楽句に続き、低音域を主体としてソロイストが息長く主題を弾き連ねる。中間部は劇的に高揚し、やがて回帰する主題もいきおい憧憬の念を増す。

第3楽章（アレグロ、マ・ノン・タント）は躍動的にして野性味すら漂うリズムが一貫する中で、2つの主題が順次交替しながら進むロンド。シベリウスより10歳年下にあたるイギリスの評論家ドナルド・フランシス・トーヴィー（1875～1940）は、この楽章を「白熊の踊るポロネーズ」と評したが、実に言い得て妙ではないだろうか。

（木幡一誠）

作曲年代：1903年　改訂／1905年
初　　演：初稿／1904年２月8日　ヘルシンキ
　　ヴィクトル・ノヴァチェク独奏　作曲者指揮
　改訂稿／1905年10月19日　ベルリン
　　カレル・ハリール独奏　リヒャルト・シュトラウス指揮
楽器編成：フルート２、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、ホルン４、トランペット２、トロンボーン３、ティンパニ、弦楽５部、独奏ヴァイオリン

サン＝サーンス：交響曲第3番 ハ短調 op.78《オルガン付》

作曲家としては楽壇を牽引する立役者。ピアノやオルガンは超一流の腕前。おまけに詩作や数学や自然科学の分野でも玄人はだし。シャルル・カミーユ・サン＝サーンス（1835～1921）こそは、往時のフランスきっての“総合的文化人”だった。おなじみの組曲《動物の謝肉祭》が、持ち前の知性とユーモアとエレガンスを寛いだ形で伝えるものだとすれば、同じ1886年に生まれた交響曲第３番は、彼のシリアスな面を何よりも雄弁に示す傑作である。

曲はロンドンのフィルハーモニック協会の委嘱によって書かれ、完成後にはサン＝サーンス自身が「持てるもの全部をつぎこんだ。これほどの達成感はもう得られまい」と語っている。そして実際、彼がこのジャンルに舞い戻ることは二度となかったし、盛り込まれた着想は確かに多彩を極める。

まず耳にも明らかなのは、副題の由来でもあるオルガン、そしてピアノまで用いて、オーケストラの音色のパレットを広げたこと。次に構成原理として導入された“循環主題”という手法。作品の核をなす主題が絶えず変容を伴いながら登場して音楽の流れを導く書式は、リスト（1811～86）の交響詩、ひいてはワーグナー（1813～83）の楽劇と共通点を持つ。それを標題音楽や舞台作品ではなく、交響曲にサン＝サーンスは応用したわけである。その点で大きな影響を受けたリストに、サン＝サーンスがこの曲を献呈しようと思い立ったのも納得のいく話だ。彼の申し出は感謝の返事とともに首尾よく受理されたのだが、しかしそのリストは初演から２ヵ月後の1886年７月に世を去ってしまい、初版譜の刊行時には「フランツ・リス

トの思い出に捧げて」という言葉が掲げられることとなった。

さらには形式面もユニーク。従来の交響曲の枠組に沿いながらも、以下のとおり、それぞれ対照的な図式を描く2楽章構成に作品がまとめられている。

第1楽章　前半部は**“アダージョ”**の短い序奏と、ソナタ形式の**“アレグロ・モデラート”**からなる。後者に入ってすぐ弦楽器の奏でる第1主題が、全曲に波及する循環主題である（最初のうちは細かくリズムを分割し、本来の姿を曖昧にしか見せない巧妙な筆さばき）。そこに序奏の動機が対置されていく。波打つような動きの第2主題は木管楽器が提示。各主題の展開と再現を経て次第に音勢が弱まると、オルガンがペダル音を含むハーモニーで静かに登場し、後半部**“ポコ・アダージョ”**が開始。これは緩徐楽章にあたり、それまで抱えていた内面の相克に宗教的浄化が与えられていくような趣だ。

第2楽章　前半部はスケルツォに相当。循環主題も活用した**“アレグロ・モデラート”**と、快活にして色彩感も豊かな**“プレスト”**が交替する形で進む。後者が2度目に現れると、新しい重要なモチーフを用いた静かな推移句へと流れ込む。続く後半部は、まず**“マエストーソ”**のテンポにより、オルガンの輝かしいコードを伴いながら祝典的なムードで幕を開ける。**“アレグロ”**に転じてからは循環主題も確信に満ちた表情で歩を進め、先行楽章の動機群も様々な形で回帰を果たす。すべての不安を払拭した後のコーダで待ち受けているのは、壮麗無比なクライマックス。

（木幡一誠）

作曲年代：1886年

初　　演：1886年5月19日　ロンドン　作曲者指揮

楽器編成：フルート3（第3はピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、シンバル、大太鼓、トライアングル、オルガン、ピアノ（連弾）、弦楽5部

© 三浦興一

9/23

UMEDA Toshiaki

Conductor

指揮 梅田俊明

桐朋学園大学卒業、同研究科修了。指揮を小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明の各氏に師事。1983、84年にはジャン・フルネにも学ぶ。1986年よりウィーン国立音楽大学に留学、オトマール・スウィトナーに師事。日本センチュリー響、仙台フィル、神奈川フィルの指揮者を歴任、2000 ～ 06年に仙台フィル常任指揮者を務めた。以後、都響、N響、読響、新日本フィルなどと長年にわたって共演。的確な棒さばきと音楽に対する誠実な姿勢でオーケストラからの信頼も厚い。桐朋学園大学、東京藝術大学非常勤講師。

Toshiaki Umeda graduated from Toho Gakuen School of Music. He studied conducting under Ozawa, Akiyama, Otaka and Fournet, and studied further at Universität für Musik und darstellende Kunst Wien under Suitner. He served as conductor of Japan Century Symphony, Sendai Philharmonic and Kanagawa Philharmonic, and is currently a part-time instructor at Toho Gakuen School of Music and Tokyo University of the Arts.

P Promenade

プロムナードコンサートNo.374

Promenade Concert No.374

サントリーホール

2017年9月23日(土・祝) 14:00開演

Sat. 23 September 2017, 14:00 at Suntory Hall

指揮 ● 梅田俊明 UMEDA Toshiaki, Conductor

チェロ ● ユリア・ハーゲン Julia HAGEN, Violoncello

コンサートマスター ● 矢部達哉 YABE Tatsuya, Concertmaster

ブラームス：ハイドンの主題による変奏曲 op.56a （18分）

Brahms: Variations on a Theme of Haydn, op.56a

チャイコフスキー：ロココ風の主題による変奏曲 op.33 （19分）

Tchaikovsky: Variations on a Rococo Theme, op.33

休憩 / Intermission（20 分）

エルガー：創作主題による変奏曲《エニグマ》op.36 （31分）

Elgar: Variations on an Original Theme, op.36, “Enigma”

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

協賛：(株)東京エイドセンター

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業） 文化庁

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

ヤングシート対象公演（青少年を年間500名ご招待）協賛企業・団体はP.71、募集はP.74をご覧ください。 YOUNG SEAT ヤングシート

お願い 演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

Violoncello

Julia HAGEN

チェロ

ユリア・ハーゲン

1995年生まれ。5歳からチェロを始め、ザルツブルク、ウィーンにて学び、2015年からはベルリンでイェンス・ペーター・マインツに師事。2010年リーツェン国際チェロ・コンクール優勝、2014年ブラームス国際コンクールでESTA特別賞を受賞。クロンベルク・アカデミーに招待され、ウィーン・フィルの室内楽プロジェクトや小澤征爾国際アカデミーに参加している。ソリストとしてウィーン・ユース・オーケストラ、ヴァッレ・ダオスタ・オーケストラと共演。使用楽器は個人より貸与されているフランチェスコ・ルジェッリ。

Julia Hagen, born in Salzburg in 1995, studied in Salzburg and Wien. Since 2015 she has studied in Berlin with J. P. Maintz. Julia won the 1st prize at International Cello Competition 2010 in Liezen, Austria. In 2014 she won the ESTA special prize at International Brahms Competition. Julia has performed as a soloist with Wiener Jeunesse Orchester and Orchestra della Valle d'Aosta.

ブラームス：ハイドンの主題による変奏曲 op.56a

まだ無名だったヨハネス・ブラームス（1833～97）が、突如世に出ることになったのは、ローベルト・シューマン（1810～56）のおかげである。20歳になったばかりの青年が書きためていた、ピアノ・ソナタ、歌曲、弦楽四重奏曲、等々。それらにシューマンは心から感嘆し、1853年、『新音楽新報』に寄せた「新しき道」というエッセイで、新人の登場を寿いだのだった。

その中にこんな一節がある。「彼がその魔法の杖をひと振りして、合唱曲やオーケストラ曲といった規模の大きな作品においても力を発揮するようになれば、さらに素晴らしい精神世界の秘密を見せてくれるだろう」

恩人からの、これは事実上の命令であるが、ブラームスは管弦楽法を、あせらず、周到に身につけていった。ピアノ協奏曲第1番（1859年初演／以下同）を手はじめに、セレナーデ第1番（1860年）、《ドイツ・レクイエム》（1869年全曲初演）――ここでブラームスの名声が一気に高まる――ときて、これから聴く熟達の《ハイドンの主題による変奏曲》（1873年）へと至る。この3年後には、いよいよ最初の交響曲が完成をみるという寸法だ。

「ハイドンの主題」を、ブラームスは、ウィーン・フィルハーモニー協会の史料館員でハイドンの伝記を準備中だったカール・フェルディナント・ポール（1819～87）のコレクションから知った。《ディヴェルティメント集》第6番の第2楽章「聖アントーニの賛美歌」とされたものから採られており、ブラームス作品の冒頭（主題呈示）の楽器法も、原曲のそれをおおむね模している。だが、現在の研究によれば、この「原曲」がハイドン作ではないことはほぼ間違いなさそうだ。ハイドンの弟子の創作か、副題が示唆するように、元はなにかの賛美歌であろうという。

とはいえ、ブラームスがハイドンに尊崇と感嘆の念を寄せていたことに変わりはない。このことは、「主題＋8つの変奏＋フィナーレ」から成る当作品を考えるにあたっても重要だ。というのも、ハイドン的なアイディアが惜しみなく援用されているからで、長調と短調を交替させながら変奏を進めるのもそうなら、歯切れのよいスケルツォ・タイプの2種（第5、第6変奏）を対照させるのもそう。ちなみに、第5変奏はきっちり合わせて演奏するのはまことに至難、一貫して弱音を保たねばならぬ第8変奏など、オーケストラの技量がモロに試される変奏も多い。

フィナーレは、同じ旋律をバス声部が延々と繰り返す上で変奏を展開する、シャコンヌ形式。トライアングルも加わり、燦然と締めくくられる。

（舩木篤也）

作曲年代：1873年夏
初　　演：1873年11月2日　ウィーン　作曲者指揮　ウィーン宮廷歌劇場管弦楽団
楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、トライアングル、弦楽5部

チャイコフスキー：ロココ風の主題による変奏曲 op.33

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）は1866年から78年までモスクワ音楽院で教鞭をとった。ここでの同僚のひとりにドイツから教えに来ていた名チェロ奏者ヴィルヘルム・フィッツェンハーゲン（1848～90）がいた。チェロ独奏と管弦楽のための《ロココ風の主題による変奏曲》はこのドイツ人チェリストのために書かれた協奏作品で、1876年末から77年初めにかけて作曲された。当然ながらフィッツェンハーゲンに助言を求めながら書き進められたと思われ、初演は1877年11月にフィッツェンハーゲンの独奏、ニコライ・ルビンシテインの指揮でなされた。

しかしながらフィッツェンハーゲンは演奏家としての視点から曲をより演奏効果の高いものとすべくチャイコフスキーの承認のないままに改訂を施し、変奏の順番も変更、さらに原曲の第８変奏を削除し、その形でピアノ・スコアを1878年に出版してしまう。彼はこの自らの改訂版で各地でこの曲を演奏し、それが好評を得たために、管弦楽用の総譜も結局この形で1889年に出されることになった。

チャイコフスキーにとってこのフィッツェンハーゲンによる改訂版は全く不本意なものだったのだが、以後この曲はこの改訂版で広まり、作曲者オリジナルによる版も1956年に出されたものの、原典重視の今日に至ってもいまだフィッツェンハーゲン版での演奏が主流（本日もこの版が用いられる）となっている。

曲は、“ロココ風”（かどうかは意見が分かれよう）の優美な主題をもとに、古典的な２管編成のオーケストラをバックとしたチェロ独奏が、そのカンタービレと技巧とを効果的に生かした変奏を繰り広げる。

本日取り上げられるフィッツェンハーゲン版では

序奏	モデラート・クアジ・アンダンテ
主題	モデラート・センプリーチェ
第１変奏	テンポ・デッラ・テーマ
第２変奏	テンポ・デッラ・テーマ
第３変奏	アンダンテ・ソステヌート
第４変奏	アンダンテ・グラツィオーソ
第５変奏	アレグロ・モデラート
第６変奏	アンダンテ
第７変奏	アレグロ・ヴィーヴォ

という構成になっているが、チャイコフスキーのオリジナルは（フィッツェンハーゲン版の番号でいうと）第1、2、6、7、4、5、3の順で並べられており、さらに最後にもう一つの変奏（アレグロ・モデラート、コン・アニマ）が置かれている。

（寺西基之）

作曲年代：1876～77年

初　　演：1877年11月30日（ロシア旧暦18日）（異説あり）　モスクワ
ヴィルヘルム・フィッツェンハーゲン独奏　ニコライ・ルビンシテイン指揮

楽器編成：フルート２、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、ホルン２、弦楽５部、チェロ独奏

エルガー：
創作主題による変奏曲《エニグマ》op.36

ヘンリー・パーセル（1659～95）の夭逝後、ヨーロッパ大陸でも知られるような作曲家を欠いた英国は、ドイツ人から「音楽無き国」と揶揄される状態にあった。これを打破したのがエドワード・エルガー（1857～1934）である。チャーミングな小品《愛の挨拶》や行進曲《威風堂々》第1番で知られるが、オペラを除くあらゆるジャンルで名作を残し、その出世作が《エニグマ変奏曲》であった。初演の大成功はエルガーを地方作曲家から国民的作曲家の地位へと押し上げたのみならず、英国音楽の復興を告げる烽火となった。

《エニグマ変奏曲》は、エルガーが妻と友人たちの印象を主題と14の変奏で描いた、いわば「音楽による交友録」である。原題はたんに「創作主題による変奏曲」であり、エニグマ（謎）という名称は「この曲には小さな謎と、曲全体に隠された大きな謎がある」との謎かけを好んだエルガーの発言に由来する。「小さな謎」とは各変奏に記されたアルファベットのイニシャルやニックネームで、大半は判明している。しかし、「大きな謎」については、「きらきら星」「蛍の光」「モーツァルトの交響曲」「ルール・ブリタニア」などが何らかの形で曲の構造に隠されているなど諸説あるが、いまだに解明されていない。

まず、メランコリックな**主題**がおずおずと提示される。

それに続く憂いと優しさが入り混じった**第1変奏「C.A.E.」**は愛妻のキャロライン・アリス・エルガー。9歳年長の姉さん女房で、不遇時代のエルガーをよく支え、かの佳曲《愛の挨拶》も彼女に捧げられている。

せわしない**第2変奏「H.D.S-P.」**は室内楽仲間でピアノを担当したヒュー・デーヴィッド・ステュアート＝パウエル。ヴァイオリンによる16分音符の細かい動きはピアノ演奏前の指慣らしを模したものである。

第3変奏「R.B.T.」はアマチュア劇団で老人役を演じるリチャード・バクスター・タウンゼント。ファゴットは彼の低い声を表している。

第4変奏「W.M.B.」では活気あふれる田舎の名士ウィリアム・ミース・ベイカーがバタンとドアを閉めて出ていく。精力的なトゥッティが駆け抜ける、30秒ほどの短い変奏。

沈鬱に始まる**第5変奏「R.P.A.」**では思慮深いインテリ、リチャード・ペンローズ・アーノルドが真面目な会話の合間にユーモラスな話を挿しはさむ。

第6変奏「Ysobel」はイザベル・フィットン。彼女はアマチュアのヴィオラ奏者だったので、この変奏ではヴィオラ独奏が活躍する。

第7変奏「Troyte」はエルガーのピアノの生徒で建築家のアーサー・トロイト・グリフィス。常に物差しを携帯して歩き回り、古い建物をみつけるとサイズを測り始める風変わりな人物。ティンパニが先導する急速なプレスト。

第8変奏「W.N.」のウィニフレッド・ノーブリーは18世紀に建てられた典雅な家に住む婦人で、ウースター・フィルハーモニー協会の事務局に務めていた。クラリネット二重奏で始まる優美な変奏。

単独で演奏されることも多い有名な**第9変奏「Nimrod」**は、親友オーギュスト・ヨハネス・イェーガーのこと。ニムロッド（Nimrod）は旧約聖書に出てくる狩の名人で、イェーガー（Jaeger）はドイツ語で「狩人」を意味する。そのため「ニムロッド」は彼の愛称だった。イェーガーは帰化ドイツ人でロンドンの音楽出版社ノヴェロの社員。エルガーの最良の理解者で、その的確な助言なしにはエルガーの名作の多くは生まれなかった。荘重な調べはイェーガーが愛好していたベートーヴェンのピアノ・ソナタ第８番《悲愴》の緩徐楽章を下敷きにしている。

舞曲風の**第10変奏「Dorabella」**（間奏曲）はエルガー夫妻が可愛がっていた牧師の娘ドーラ・ペニー。彼女はエルガーの弾く旋律に合わせて即興で優美な踊りを披露することがあった。愛称はモーツァルトのオペラ『コシ・ファン・トゥッテ』に登場するドラベッラに由来する。

あわただしい**第11変奏「G.R.S.」**ではヘリフォード大聖堂のオルガニスト、ジョージ・ロバートソン・シンクレアの愛犬のブルドッグ、ダンが水中に落ちて必死に犬かきをする。エルガーは大の愛犬家で、水から上がったダンが、「ワン！」と喜ばしげにひと吠えして、体から水を払う様子を愛情こめて描写している。

第12変奏「B.G.N.」のベイジル・G. ネヴィンソンはチェロ奏者で、第２変奏のステュアート＝パウエルと同じくエルガーの室内楽仲間だった。ゆえにこの変奏は独奏チェロが深々とした音色を奏して始まる。

第13変奏「＊＊＊」（ロマンツァ）のタイトルには単にアステリスクが３つ並んでいる。総督として任地に赴く兄に従ってオーストラリアへ向かう貴族令嬢レディ・メアリー・ライゴンと言われていたが、近年ではニュージーランドに移住し再び会うことのなかった初恋の女性ヘレン・ウィーバーという説が有力である。ティンパニが客船のエンジン音を模したトレモロを弱音で叩き続ける上を、クラリネットの独奏が滑り込み、メンデルスゾーンの序曲《静かな海と楽しい航海》第2主題（チェロが提示する）のメロディを寂しげに奏して船旅と別離を示唆する。

第14変奏「E.D.U.」（フィナーレ）では、長い雌伏の時代を経て、いよいよ世に出ようとする威風堂々のエルガーの姿が浮かんでくる。「エドゥ」とは妻アリスがエルガーを呼んでいたドイツ語風の愛称で、オルガンを含むフル・オーケストラの威力が全開となる壮麗な終曲である。

（等松春夫）

作曲年代：1898～99年
初　　演：1899年6月19日　ロンドン　ハンス・リヒター指揮　管弦楽団
楽器編成：フルート２（第２はピッコロ持替）、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、コントラファゴット、ホルン４、トランペット３、トロンボーン３、テューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、オルガン、弦楽５部

10/1

Rossen GERGOV

Conductor

指揮　ロッセン・ゲルゴフ

　1981年ブルガリア生まれ。ウィーン国立音楽大学でレオポルト・ハーガーに師事。2007年エフゲニー・スヴェトラーノフ国際指揮コンクールで入賞。これまでにBBC響、バンベルク響、ウィーン響、トーンキュンストラー管、バーゼル響、パリ室内管、スコットランド室内管、アンサンブル・モデルンなどを指揮。幅広いレパートリーを持ち、古典派から現代音楽までその才能を発揮している。オペラ指揮者としてもウィーン・フォルクスオーパー、ブレゲンツ音楽祭などへ客演。2015年よりブルガリア国立放送響首席指揮者。

Rossen Gergov was born in 1981 in Bulgaria. He was a Laureate of Evgeny Svetlanov International Conducting Competition in 2007. Gergov has performed with orchestras including BBC Symphony, Bamberger Symphoniker, Wiener Symphoniker, Tonkünstler Orchester, Sinfonieorchester Basel, Ensemble orchestral de Paris, Scottish Chamber Orchestra, and Ensemble Modern. He also conducted at Volksoper Wien and appeared at Bregenzer Festspiele. Since 2015, Gergov has been Chief Conductor of Bulgarian National Radio Symphony.

©Armin Bardel

都響・調布シリーズNo.19
ロシアとスペインの名曲の饗宴

Chofu Series No.19

TMSO

調布市グリーンホール

2017年10月1日(日) 14:00開演
Sun. 1 October 2017, 14:00 at Chofu Green Hall

指揮 ● ロッセン・ゲルゴフ Rossen GERGOV, Conductor
ハープ ● 吉野直子 YOSHINO Naoko, Harp
コンサートマスター ● 山本友重 YAMAMOTO Tomoshige, Concertmaster

グリンカ：歌劇『ルスランとリュドミラ』序曲 (5分)
Glinka: Overture to "Russlan and Ludmila"

ロドリーゴ：アランフェス協奏曲（ハープ版） (23分)
Rodrigo: Concierto de Aranjuez (version for harp)

Ⅰ Allegro con spirito
Ⅱ Adagio
Ⅲ Allegro gentile

休憩 / Intermission（20 分）

チャイコフスキー：交響曲第4番 ヘ短調 op.36 (44分)
Tchaikovsky: Symphony No.4 in F minor, op.36

Ⅰ Andante sostenuto - Moderato con anima
Ⅱ Andantino in modo di canzona
Ⅲ Scherzo: Pizzicato ostinato. Allegro
Ⅳ Finale: Allegro con fuoco

主催：公益財団法人東京都交響楽団
提携：公益財団法人調布市文化・コミュニティ振興財団
後援：調布市教育委員会、府中市教育委員会、稲城市教育委員会、多摩市教育委員会

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

お願い 演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

Harp

YOSHINO Naoko

ハープ

吉野直子

世界のハープ界で最も注目されている逸材。1985年、第9回イスラエル国際ハープ・コンクールに参加者中最年少で優勝。以後、ベルリン・フィル、イスラエル・フィル、フィラデルフィア管などと小澤征爾、アーノンクール、ブーレーズ、アバドらの指揮で共演。また、クレーメル、ヴェロニカ&クレメンス・ハーゲン、シュルツ、パユらとの室内楽や、ザルツブルク、ルツェルン、ロッケンハウス、グシュタード、セイジ・オザワ松本など音楽祭への参加など華やかに活躍。数々のCDも高く評価されている。

Naoko Yoshino is one of the most outstanding harpists in the international platform today. She has performed with orchestras including Berliner Philharmoniker, Israel Philharmonic, and Philadelphia Orchestra under batons of Ozawa, Harnoncourt, Boulez, and Abbado, among others. A frequent guest in music festivals of Salzburg, Lucerne, Lockenhaus, Gustaad, and Seiji Ozawa Matsumoto, Yoshino is also known as a recitalist and a chamber musician. She has worked with musicians such as Kremer, V. Hagen, C. Hagen, Schulz, and Pahud.

グリンカ：
歌劇『ルスランとリュドミラ』序曲

ミハイル・グリンカ（1804～57）の歌劇『皇帝に捧げる命』は1836年に初演され、ロシア初の本格的オペラとして大成功を収めた。その後、彼は２作目の歌劇の題材として、アレクサンドル・プーシキン（1799～1837）が1820年に書いた民話的な詩『ルスランとリュドミラ』を採り上げることを決心した。

当初は原作者本人に台本を書いてもらうつもりであったが、プーシキンは1837年２月に、自らの妻をめぐる決闘の際に受けた傷がもとで急逝してしまった。仕方なしにグリンカは、台本を待たずに先に全体のプランと各場面の詳細を固め、作曲を開始する。その後、数人の台本作者がグリンカの旋律に詩をあてはめるなどして台本を作り、歌劇は完成に至った。

物語は、キエフ大公国のリュドミラ姫が、婚礼の宴のさなかに魔術師チェルノモールに連れ去られ、花婿である騎士ルスランが様々な冒険を重ねた末に、白魔術師フィンの力を借りて姫を取り戻すというもの。ニコライ・リムスキー＝コルサコフ（1844～1908）のいくつかの歌劇や、セルゲイ・プロコフィエフ（1891～1953）の『三つのオレンジへの恋』といったメルヘン・オペラの草分けと言える。

序曲は第５幕フィナーレの素材に基づき、初演のリハーサルと並行して作曲された。短い序奏に続いてあらわれる急速で華麗な第１主題と、流麗に歌われる第２主題とによるシンプルなソナタ形式をとる。

（相場ひろ）

作曲年代：1837年～1842年12月
初　　演：オペラ全曲／1842年12月９日（ロシア旧暦11月27日）　サンクトペテルブルク
楽器編成：フルート２、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、ホルン４、トランペット２、トロンボーン３、ティンパニ、弦楽５部

ロドリーゴ：
アランフェス協奏曲（ハープ版）

20世紀スペインの作曲家ホアキン・ロドリーゴ(1901～99)は、幼時に視力を失ったが、早くから楽才を発揮、バレンシア音楽院で作曲とピアノを学び、1927年からはパリのエコール・ノルマルでポール・デュカス（1865～1935）に師事した。1936年のスペイン内戦勃発後しばらくドイツやフランスで過ごすが、1939年に帰国、以後マドリードを本拠に作曲活動を行った。

彼の作品中最もポピュラーな《アランフェス協奏曲》は、スペイン内戦時に着想され、1939年に完成されたギター協奏曲である。初演は1940年にバルセロナで行われ、続いてマドリード初演もなされたが、いずれも大成功で、ロドリーゴの名は世に広く知られることになった。初演のソロはスペインの名ギター奏者レヒーノ・サインス・デ・ラ・マーサ（1896～1981）で、ロドリーゴは作曲にあたって彼から多くの助言を得ている。

“アランフェス”とはスペイン中部マドリード州の南方の名所で、16世紀にフェリペ２世が王宮の建設を命じ、18世紀から王家の離宮の所在地として栄えた。ロドリーゴはこの協奏曲で貴族性と民衆性とが融け合っていた18世紀スペイン宮廷を映し出したと述べている。スペイン内戦という祖国の危機の中にあって、スペインの古き良き時代へ思いを馳せながら作曲が進められたものだろう。明快な形式と親しみやすい楽想がギターの特性に結び付いた魅力的な作品だ。

なお本日演奏されるのは、ギターと同じ撥弦楽器であるハープに独奏を置き換えた版。これは、ハープの名手ニカノール・サバレタ（1907～93）との関わりの中で編まれたものである。

第１楽章　アレグロ・コン・スピーリト　ニ長調　序奏付きソナタ形式。序奏でハープがスペイン風の複合リズム（8分の６拍子の中に４分の３拍子の動きを挟む）で和音をかき鳴らし、主部の第１主題もこのリズム上にオーボエと第１ヴァイオリンによって明るく示される。

第２楽章　アダージョ　ロ短調　幻想的な緩徐楽章で、イングリッシュホルンが歌い出す哀愁溢れる主要主題は様々な編曲でも有名。この旋律についてのちにロドリーゴは、アランフェスを訪れた際、初めての子を流産した女性に心痛めて書いたと述べたという。この主題が変奏的に回帰する間に２つのエピソードが挟まれ、途中劇的な盛り上がりも示すが、最後はまた静かな叙情のうちに消えていく。

第３楽章　アレグロ・ジェンティーレ　ニ長調　４分の２拍子と４分の３拍子の頻繁な交替が変化に満ちたリズムの動きを作り出す。ロンド形式で、ハープと管弦楽の活発な掛け合いで明るく運ばれる。

（寺西基之）

作曲年代：1939年
初　　演：1940年11月　バルセロナ　レヒーノ・サインス・デ・ラ・マーサ独奏（ギター独奏版）
楽器編成：フルート２（第２はピッコロ持替）、オーボエ２（第２はイングリッシュホルン持替）、クラリネット２、ファゴット２、ホルン２、トランペット２、弦楽５部、独奏ハープ

チャイコフスキー：交響曲第4番 ヘ短調 op.36

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）は19世紀後半のロシアの作曲家の中でも、交響曲をはじめとする西欧の伝統的なジャンルに特にこだわった作曲家だった。そのために彼は、ロシアの国民主義的な作曲家グループ“力強い仲間たち（5人組）”から“西欧派”として非難されたりもしている。しかし改めて指摘するまでもなく、チャイコフスキーの交響曲に脈打っているのはロシアの民族的精神であった。とりわけ第3番までの交響曲において、彼は伝統様式のうちにいかにロシア的な民族表現を打ち出すかについて、様々な独創的試みを行っている。

そうした民族性の上にさらに自伝的な要素が加わってくるのが、1877年に作曲された交響曲第4番である。チャイコフスキー自身、パトロンで文通相手であったフォン・メック夫人（1831～94）に宛てて、この交響曲に込められた標題的意味を書き送っているが、それによるとこの作品のテーマとなっているのは人生における“運命”である。

この交響曲が作曲された時期、チャイコフスキーの人生は危機的な状況にあった。すなわち結婚の失敗である。彼は、この曲の作曲に本腰を入れるようになった1877年5月に突然アントニーナ・ミリューコヴァ（1849～1917）という女性から激しく求愛され、彼女に押し切られる形で7月に結婚するが（彼にとっては結婚によって自分の同性愛をカモフラージュしたかったということもあったようだ）、もともと少しの愛も感じてなかった彼女との新しい生活はすぐに破綻してしまった。チャイコフスキーは彼女のもとから逃れ、精神的に相当落ち込んでしまう。第4交響曲の作曲はこうした状況の中で断続的に進められ、最終的には転地療養先のイタリアでようやく書き上げられたのだった。

この交響曲の標題的テーマとされる“運命”とは、そうした彼自身の体験と結び付いたものであると考えて差し支えないだろう。このように自伝的意味合いを民族的な表現法に重ねる交響曲のあり方は、以後のチャイコフスキーの交響曲にも受け継がれていくことになる。初演は1878年2月にニコライ・ルビンシテインの指揮によってモスクワで行われている。

第1楽章　アンダンテ・ソステヌート～モデラート・コン・アニマ　まずホルンとファゴットのファンファーレ風動機が導く序奏で始まる。この動機は「交響曲全体の萌芽、主楽想で、運命を表す」（作曲者自身によるフォン・メック夫人への解説の内容。以下の「」も同様）。続く主部の第1主題は“ワルツの動きで”と記されながらも、実際はきわめて不安定な憂鬱さに満ちている。それに対し「甘い柔らかな夢」

の第２主題が対照されるが、「それはただの夢でしかない。運命は残酷にわれわれを呼び起こす」。人生におけるこうした「悩ましい現実と幸福な夢との交錯」のうちに楽章は劇的な緊張を高めていく。

第２楽章　アンダンティーノ・イン・モード・ディ・カンツォーナ　物悲しいオーボエの旋律で始まる変ロ短調の緩徐楽章。「この楽章は哀愁を表現している。仕事に疲れ夜半ひとりでいる時の憂鬱な感情である」。中間部ではやや明るい動きに転じるがこれは「過去を思う楽しさ」である。しかしそれも一時の明るさでしかない。

第３楽章　スケルツォ／ピッツィカート・オスティナート／アレグロ　弦のピッツィカートで奏されるヘ長調の軽快な無窮動風のスケルツォは「気粉れなアラベスク、とりとめない空想」。一方、中間部に聞こえてくる民俗風の歌と軍楽隊の調べは「空想の中の酔った農民の歌と軍隊の行進」で、「現実とは何の関係もない」。

第４楽章　フィナーレ／アレグロ・コン・フオーコ　一転してお祭り騒ぎのようなヘ長調のフィナーレで、力強い第１主題、ロシア民謡「野に立つ白樺の木」による第２主題、乱舞する第３主題を巡ってロンド風に展開する。「自分の中に喜びを見いだせないなら……民衆の中に入っていきなさい。彼らは自分を忘れて喜びに身を任せることができるのだ」。果たしてチャイコフスキーは本当に民衆の祭りの中に入り、そこに喜びを見いだすことができたのだろうか。ことさら明るく振る舞おうとしているかのようなこのフィナーレは、作品の持つ本質的な悲劇性を一層際立たせているようでもある。

（寺西基之）

作曲年代：1877年～1878年１月７日（ロシア旧暦1877年12月26日）
初　　演：1878年2月22日（ロシア旧暦10日）　モスクワ　ニコライ・ルビンシテイン指揮
楽器編成：ピッコロ、フルート２、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、ホルン４、トランペット２、トロンボーン３、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、弦楽５部